

小田実全集（小説 第15巻）

タコを揚げる

—ある私小説—



講談社

小田実全集

Makoto Oda

タコを揚げる

—ある私小説

Aのことでタコのイメージが眼について離れないのは、やはり、そのとき、彼がタコを実際に手にしていたからではないかと思う。お手製の小さなタコであった。かたちは五角形だったか、六角形だったか、とにかく角形で、色は黄色。

私はそのタコが大空高く舞い上るのを実際に見たわけではない。タコはいかにも素人が作ったという感じのもので、それだけの能力をもつものであったかどうか、私は知らない。ただ、Aのことを考えると、必ず眼に浮かぶのはタコで、その黄色の角形のタコはうすぐろいまでに澄みきって蒼い宇宙に黄色の一点となって舞い上っているのである。それほど、彼がそのとき手にしていたタコの印象が強烈だったのだろう。大げさな言い方をすれば、私はそのタコから逃れられないでいて、そこから逃れられない以上、私はAから——Aの存在が意味する、いや、意志するものから逃れられないでいる。ことにAはひとりでなかったから、そういうせつぱつまった感じが深いのかも知れない。Aは自分の子供（Aという名前にしておこう。べつにAがAにぞくしているという意味でそう呼ぶのではない。AがAのもつ属性を共有しているゆえに、そこにおいてたとえば、その属性を共有していない私とは別世界、いや、別の次元に存在している人間であるゆえに、そんなふうと呼ぶのである）をそばに連れていて、Aもまたタコをもっていた。

Aは見ばえのよい男ではなかった。北欧系のアメリカ合州国人で、北欧系にすれば背は低く、髪は

毛もみごとな金髪だとは言いかねた。名うての民族雑沓の合州国のことだ、先祖はたしかにアンデルセンの土地からバイキングの船に乗ってやって来たとしても、その民族雑沓のなかをあつちに行きこつちにおち当りしているうちに、たとえば、イタリア人の血が入った、ユダヤ人の血がまじり合ったというようなことも起つていたにちがいない。もちろん、いくら民族雑沓の国の合州国のことでも、あそこはまた名うての人種差別国で、Aの血のなかに黒人の血が入り、私のようなアジア人の血が混入したとは信じがたいが、Aに言わせれば、自分はそんなことは超越したところだろう。たしかに彼はそこまでなみなみなならぬ意志を抱いて、そして、タコを抱いて、そのとき、そこにいた。

小柄であつた。メガネをかけていた。みごとと言いかねる金髪——いや、赤茶けた髪の毛はちぢれていた。私がAについておぼえていることはただそれだけぐらいのことで、極端なことをありてい言つてしまえば、彼が、今、突然、私のまえに姿を現わしたとしても、すぐにその彼がAだとみとめ得る自信はないのだ。もちろん、現われるとしたら彼はタコ——その黄色の角形のタコを抱いて現われるにちがいでなくて、そこで、私はただちに彼はAだと気づくにちがいないのだが。——

そんなとき、彼はそのときもそうであつたように、私が微笑をむけても、まるではじめて会つた他人に対するように、いや、ジャングルのなかで道に迷つたあけく突然ジャングルの住民にでも出会つた旅人のように、安堵と期待と不安と親しみとが複雑に入りまじつた視線で私を見返しただけで、べつに微笑を返しはしないだろう。それから、彼はタコをさし示しながら（そのときもまさしくそうしたのだ）、みんながこのタコを売つて運動の資金をつくり、彼が今よしとする運動を世界中にひろげるのだと説明するのにちがいないのだが、その説明のあいだじゅう、まだ、キミはそこにいるのです

ねという軽侮、——というよりは、あわれみ、それともうひとつは、キミはまだそこにいるか、ワタシはもうそこを離れてしまったのですよ、とり返しをつかないことをしてしまったのですよという羨望、それら二つのものにみちた視線でAは私を見ているにちがいない。そのときもそうで、その場の主人役である私を、Aはじつとそんなふうな視線で見つづけていた。

Aの言ったことは、すくなくとも、そこで、人びとに告げようとしたことは簡単だった。すなわち、ベトナム戦争は自分の祖国合州国が犯したゆるしがたい罪悪だ。それゆえに、抗議のために、自分は合州国の人間であることを放棄する。

ことはまさしく原理としては簡単なことであつた。しかし、実際のことからとしては、これほど複雑、そして、重大な決意はないにちがいない。Aの、ことのしさを説明する口ぶりはそれを示すように重く、まわりくどく、明瞭さを欠いていた。そのとき、彼が原理の単純明快さにふさわしく、オレハモウアメリカ人デアルコトハマメタヨとただ一言はつきりまつ先に言つたとすれば、それはもうそれだけでけっこうな新聞の大見出しで、私の心にそうした思いが実際にそんなふうな大見出しのイメージとともに横切つたことは否めない事実だ。

私がそんな気持になつたことをあまり大声でとがめないでいただきたい。それは記者会見の席でのことで、その記者会見と称するものは私が企画したものだつたが、もともとはAの頼みによるのだ。私がここで「記者会見と称するもの」と書くのは、ケンソンめかして言うつもりがあつてのことではない。まず、かんじんの記者がたいして来てくれなかつたという事情があつた。しかし、まあ、それはそれでも、ひそかにお目あてにしていた大新聞の記者もカメラマンまで連れて来ていて、サマには

なった。どういうわけで彼がカメラマンまで連れて来る気になったか、まさか蒼ぐろい宙空に黄色の一点となつて舞い上るタコのイメージを彼自身が印画紙の上に定着させようという魂胆があつての上のことではないと思うのだが、カメラマンを連れて来たのは彼ひとり、やはり、彼はそのことかねがね顔見知りの私に好意を示したかつたのだろう。カメラマンは私にそんな義理を感じることはなかつたから、AとAと、二人がともに手を出して両端を保持するタコの写真をきわめて事務的にとつた。トリマスヨ。イイデスカ。ハイ、一丁上り。そんなふうにはまさかカメラマンは言わなかつたが、まさにそんなふうには彼はニコンをかまえて何枚かつた。

しかし、問題は、来てくれた記者の数（の少なさ）のこともなければ、カメラマンの写真のとり方（の事務的さかげん）にあつたわけでもない。何よりもまず、それは記者会見の内容の問題であつた。そして、もうひとつ言えば、その内容を物語る当の人物のことであつた。

ベトナム戦争反対のことなら、もう判つている。会見の席に来ていた記者の大半は、私の見たところ、ベトナム戦争反対論者で、熱心にベトナム反戦を説くAの意見にべつに反論したわけではない。ただもうそれはまつたくあたりまえのことで、たぶん、そんなふうにするにきまつていることなので、べつにあらためて書くまでのことでもないだろう。なみいる（というのはいささか文学的にすぎる形容で、もつと正確に言えば、「なみいる」から「なみ」をとり去つて「いる」とだけ言つたほうがよいかも知れない。たしかに、記者は、いたのである。ありがたいことに来てくれていたのである）記者を見わたしてみて、私はただちに、Aへの共感とともにちよつとしたらだち、それにかんがりの退屈を彼らの表情に読みとつていた。おれだつて、これなら記事にならないと思うだろうな。もちろん、

小声であったが、私はそんなふうに心のなかでつぶやいていくくらいだ。

そのベトナム反戦ということがらがもつとえらい人の口を通して語られていたのなら、記者たちの反応もちがっていたのにちがいない。あるいは、たとえば、ベトナムの戦場帰りの「グリーン・ベレ」の一員によつて語られるなら、たとえ彼がまったく無名の人間であつたとしても、それはそれで記者たちの退屈とねむ気を十分に吹き飛ばしたことだろう。あるいは、これは記者たちの名譽に賭けて言つておきたいことなのだが、Aの述べるベトナム反戦の原理というようなものもつと哲学的な啓示にみちたものであつたなら、サツまわりで頭のなかのものをすつかりすりへらしてしまつた社会部のくたびれ中年記者でも、もう少し眼を輝かしてAの話に聞き入つたかも知れない。

彼の決意のことはさておいて、その決意に至る彼の反戦の志こころざしについては、すべてがあまりに平凡だつた。話の中身もそうなら、Aという人物自身、J・P・サルトル氏でもなければ「グリーン・ベレ」でもない。合州国のなかほどのところにある地方都会に生まれて、そこで育つて、高等学校へ行つて、そこを出て、あちこち会社づとめをして、それから、どうしたのか。ワイフと離婚したのだという人があつた。離婚が、どこで、どう、ベトナム反戦と結びつくのか、とにかく、彼はワイフと別れ、子供ひとり、つまり、Aを連れて日本にやつて来た。

なぜ、日本なのか。

そのところもはつきりしない。ベトナム戦争ということとなると、今さらあらためて言うまでもないことだが、日本は最大の荷担者で、そこで、彼のような、ある意味ではなかなか劇的とも言える行為つきでベトナム反戦を訴えるのは意味あることだ。効果的でもある。ただ、彼がもともとそんな

ふうな気持をもって日本にやって来たのかどうか。彼の話は、そういうかんじなことになるとうしぎに曖昧になった。日本のことも、ベトナム反戦運動のことはおろか労働運動や学生運動のことまでよく知っていて、なるほど、これなら日本を決意の地にえらんだことも理解できないこともないが、それでいて、日本に自衛隊があるなどということは考えてもいなかったのだ。いや、それはいくら説明しても、彼には、まだ十分に判っていたとは言えない。シカシ、憲法二八、日本ハ軍隊ヲ持ツテハイケナイト書イテアルと、彼は、私が事実を説明しにかかると、くり返し言った。そのところは日本人である私にも理解不可能なことがらなので、どだい、日本語でも説得の根拠薄弱なことを下手な英語でうまく納得させることなどできるはずもない。そこへもつて来て、彼は西洋人によくある、人に逆らうことをもつて論理的だとすくなくとも自分のことはみなしている人種で、たださえ話していると疲れる。まして、問題がそういうそもそも非論理なことからなると、これはもう、彼のような一言居士の勝ちである。話していて、決して愉快な人物ではなかった。私を論理でねじ伏せると、彼は勝ち誇ったように私を見て、その勝利の眼の色は残忍だと思った。

肉体的な欠陥も、そこには影を落していたかも知れない。さつき言い忘れたが、小柄で見ばえのないからだの持主である上に、子供のとき小児マヒをわずらったかどうかで、右足が悪く軽いピッコをひいていた。そんなこと大したことはないと言いついてしまえば、それまでのことである。ただ、彼とつきあってみて判つたのは、彼は、そんなふうにすぐさま言い切れる人間ではないということであつた。

まあ、つまるところ、大した人物ではない。くり返して言うが、彼は、どうあつても、J・P・サ

ルトル氏でもなければ、「グリーン・ベレ」でもない。もちろん、こうした人物も、Aというひとりのアメリカ合州国の中年男の人生を描き出す小説のなかでは光彩を放つこともあるにちがいない。ただ、その記者会見の席は、その目的にふさわしい場所ではなかった。私の顔見知りの大新聞の記者も、他のくたびれ中年男記者諸氏も、そこまでの興味を彼にもたないように見えたし、私はと言えば、自分で小説を書く男のくせに、Aの西洋人にしてはめずらしく顔色のわるい、つまり、日本のくたびれ中年男なみにさえない表情でいるAの顔の背後に横たわるこまかな人生のヒダに眼をむける気持ちにどうしてもなれないでいた。まず、私自身が疲れきっていたという事情があつた。小説を書くという自分の仕事も、それからそのころ自分がかかわり始めたベトナム戦争反対の運動もたいしてうまくは行つていなかった。そこへもつて来て、このAの記者会見のために、あれこれ私は気をつかつていた。いや、正直に言うと、私はもう彼とのつきあいに参つてしまつていたにちがいない。ブツブツ口なかでつぶやくようにしてしゃべる彼の歯切れのわるい英語は、黙つてきいていただけで、ときには背中が痛くなつた。しかし、ほんとうのところは、そうした英語自体のことより、問題は、やはり、彼がそんなふうにしてきわめて要領わるげに語る決意にあつたにちがいない。決意の中身が私をくたびれさせたのである。それは、私に無限に疲労を強いた。

一口に言つてしまえば、アメリカ合州国人ヲ止メルコトである。もちろん、それには前提があつて、ベトナム戦争ニ反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ。

その前提のほうは判つた。いや、もうそれは、さつきも言つたことだが、新聞記事にもならないくらいあたりまえのことなのだ。しかし、その前提から導き出されて来た結論の決意のほうはどうなの

か。そこには飛躍があつた。

ベトナム戦争に反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ——よろしい。それで、

声明に署名する。

新聞広告をする。その企てにお金を出す。

集会をする。

デモ行進をする。

アメリカ合州国大使館前に坐り込みをする。

そこまでぐらいなら判る。したがつて、もう、そこまでぐらいのことなら、新聞記事にもならない。

よほどのことがなければ、ならない。

合州国の軍隊から脱走する。

これも判る。しかし、

焼身自殺をする。

これは、どうか。

ことわつておくが、私がAの記者会見の準備をしたときには、日本人の焼身自殺はまだ起つていなかった。由比忠之進さんが首相官邸のまえで自分のからだに火をつけたのは、それから二年ほど経つてからのことだった。

焼身自殺はたいへんな行為だと思ふ。さつき述べた前提からその結論に至るまでには、ためらいと決意のウヨ曲折があまたあつたにちがひなくて、それを想像するだけでも、私はくたびれる。まして、

決意を実行するということとなると、私の想像を絶する。ただ、そうは言っても、前提から結論までウヨ曲折はあつても、二つのあいだのつながりはまだ理解できるような気がする。それは、Aの場合の前提と結論のつながりに比べてみると、はつきりする。すくなくとも、Aの場合に比べて、論理的に明快なのである。すつきりとしている。なぜ、そうなのか。焼身自殺の場合、自殺者は、その行為において死に、そこで、彼の前提から結論に至る論理、そして、倫理は完結する。

死刑囚は、あれは刑務所にいるのではなく拘留所にいるのだという話をきいたことがある。刑務所というのは刑の執行を行なうところで、囚人はそこで彼に科せられた刑の執行を受けているのである。刑の執行を受けるまえの人間をかりにとじこめているところが、すなわち、拘留所で、死刑囚は、考えてみると、まだ、刑の執行を受けていないのだ。そこで拘留所にいるというわけなのだが、焼身自殺という行為で私が想起するのは、ひとつは、こういう死刑囚のこともありなのである。焼身自殺者は、自分の死というこの世の中の誰にとつても最後の「行為」において、自らの論理、倫理の体系を閉じる。そこで、いわば、取りこぼしがない。

それに対して、ベトナム戦争に反対し、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ、アメリカ合州国人デアルコトヲ止メル人間は、どうなのか。やめたあと、彼はまだ生きる。生きつづけている。これが、ヤヤこしい。もつとも、そのとき、私にそれらすべてのことのあるありようがはつきり見えていたわけではない。

2

記者会見に、Aはタコをもち、A、つまり、子供を連れて出た。AもAのにくらべて小型のタコを

もっていたから、合計二つのタコがその場に立ちあらわれていたことになる。

「子連れ何とかやらですな」と、顔見知りの例の大新聞の記者が言った。「子連れ狼」というようなことばがはやり出すまえのことで彼はそんなふうと言ったのだが、そのころ、そういうことばがはやっていたら、彼はすぐさま使ったにちがいない。彼はむやみやたらと流行語を使う男で、それがジャーナリストたるものの本分と心得ているようにも見えてときどきウンザリしたが、彼の人のよさを私は愛していた。「子連れ何とかやら」に私も応じなくてはならない。それで、「子連れ平和行脚というところかな」と私は言った。

「それにしても、タコと国籍離脱はどうにも結びつかない感じですか。」

記者会見がなんとかカッコウをつけて終り、AがAを連れ、タコをもつて立ち去ったあと、二人を見送るようにして見ていた記者が急にふり返って言った。とつさのことで私が黙っていると、記者は、「ま、どっちも突拍子もない感じで」と、自分で自分にうなずくようにつぶやいた。

いつもなら、おしゃべりな彼のことである。それにぎつくばらんであることがこれもまたジャーナリストの資格であると確信しているにちがいない、私が記者会見に連れ出した人物やら、そこで発表したニュースやらについて、無遠慮にあれこれ言い出すのだが、「あれ、ちよつとタマがわるいですか」「少し長すぎましたよ。このニュースであれだけしゃべったら、ダレて来る。かえってよくないですよ」、その日はそれだけしか言わなかった。本来なら、Aのような人物は、彼の無遠慮な品さだめのいい対象であるはずなのだ。そこへもつて来て、Aは「子連れ何とか」で、おまけに、親子そろつてタコをもつて来ている。

タコを売って歩くという考え自体が、いかにもバカげたものであった。ほんとうを言うと、私は、ベトナム戦争ニ反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ、アメリカ合州国人デアルコトヲ止メルということのほうは知っていたが、タコ云々はAが記者会見の最中に、彼のその決意のわかちがたい一部分であるかのように言い出すまで知らなかったのである。たぶん、彼は、まもなく私にそのことを告げれば、私はとめるにちがいないと考えたのだろう。それは実際その通りなのだが、Aにはそういうことを見ぬく才覚はふしぎにあつた。あとできくと、私といつしよに記者会見の準備をし、新聞社や通信社に前日の午後いつばいを使って誘いの電話をかけた私の運動の若い仲間たちは知っていた。「なんや、知りはらへんかつたんですか。」そのうちのひとりが、どういうわけからか、関西弁を使って言った。「ボクラ、タコの話、なかなか面白いと思つてましたんやけどな。」

面白いかどうか。いや、たしかに面白い話であつた。それにはまちがいが無い。タコをつくつて売りがながら、彼の志こころざしを世界のみんなが共有し、平和が世界に訪れる。そして、これもまた大事なことだが、彼のくらしもそこで成り立つ。

ただ、どのようにして、売り歩くのか。いや、そもそも、タコは、どこで、誰が、どのようにするのか。いったい、タコを買う人間がどれだけいるのか。

Aがタコの話をし始めたとき、あ、これはまずいな、と私はとつきに思った。そして、まるで自然な連想のようにして、ひとつの顔が浮かんだ。

と言つて、美しい女人の顔が浮かんだというのではない。メガネをかけたくたびれた中年男の顔で、それこそ、これもまた、どこにでもある、どこにでもお目にかかれる顔だ。ただ、その顔は思いつめ

ていた。眼に異様な光があった。

中年男はバスの運転手で、べつに政治的な運動に加わっていたのではない。若いときも、彼の言い方を借りれば、「その気はま^けつたくなかった。」その彼——Bが、河のなかに子供を抱きながら入っているベトナムの農婦の写真を見て、私たちが何度も行なったデモ行進にやつて来るようになった。いや、そのうち、自分で自分にできることをやろうという決意をかためた。

バスを一台買おうというのである。幸いにも、自分はバスの運転ができる。それで、バス会社をやって、ベトナム反戦を人びとに訴える「反戦バス」を日本中に運転してまわりたい。会社をやめれば、退職金が入る。それで、バスは中古品なら買える。

はじめて、その話をきいたときには、私はあわてた。そんな無謀なことを私は言ったが、Bはそくぎに、ベトナムの人びとはそれほどひどい目にあっているのですとことばを返した。彼のまえで、政治的な効果を云々したところで、それは無駄にきまっていた。私がそう言ったところで、彼は、これは、まず、自分の内面の問題だと、そんなふうになく学生たちのように言ったかどうかは知らないが、結論としてはそういうようなことになる決意を述べたにちがいない。妻子のことを言い出したところで、それもまた自分の問題だと言って返して来るだろう。中年男はなかなか決意しないものだが、いったん決めるとなると、どんなことだって決めてしまうのではないか。私の友人の神経科の医者が、若いときの自殺は、いかにも自殺したがるやつがするものだが、中年になるとちがうね、自殺するから自殺するという感じだな、あれは、とめようがないと言ったことがあった。

Bが実際に会社をやめ、バスを買い、全国行脚に出かけたという話をきいたのは、それから二月も

経たないころだった。そのあと、バスがどこをどう走り、どのように彼が考える運動が進展して行ったか、私たちは追跡する手立てを失なってしまうていた。ときおり、彼のことは話題に出て、出るたびに私の心は痛んだが、どうしようもない。そして、時間というものはおそろしいものだ、一年が経ち二年が経ちするうちに彼のことは私の心からさえ消えていた。

彼がそこに立ちかえつて来たのは——いや、彼はケチくさい私の心などにかぼそく立ちかえつて来たのではない。もつと荒々しく音をたてて、私の現実の視界のなかに躍り入つて来たのである。

私は東京から大阪まで行く用事があつて新幹線に乗つていた。東京を出て半時間ほど経つたころ、突然、列車の通路の扉が開いて、それとともに、みなさん、笑いは人間健康の素、家庭の平和も笑えば来る、日本の平和も笑えば来る、ベトナムの平和も笑えば来る、世界の平和も笑えば来ると、大声で叫びながら、「日本・ベトナム・世界平和ニコニコ運動」というタスキをかけた上半身はだかの男がからだ全体ではずみをつけるようにして入つて来た。文字通り、それは躍り入つて来るような感じだったが、ことさらに私がそう感じたのは、やはり、その男がB——かつてのバスの運転手であつたからにちがいない。彼はまつすぐに私の視界のなかに入つて来た。私のからだの内部の中心のところまで、彼の跳躍は伸びて来た。

私はとつさに眼を伏せていた。と言っても、Bのその姿が正視できなかつたというのではない。たぶん、私のほうが正視できない存在としてあるように感じたのである。彼はそれだけのことをくり返して述べ、模範を示すように実際に笑つた。

ひきつったような笑いではなかつた。もつと自然な笑いで、決して、無理して笑っているのではな

い。その笑っているBには、かつて、私のまえにはじめて立ちあらわれて来たときのくたびれた中年男の面影はなかった。彼はほんとうに心底からユカイそうに笑っていて、そのとき、私が名のり出ても、彼は、やあ、おひさしぶりで、と何のこだわりもなく私のそばに駆けよつて来て、いや、いつしょに笑いましょうと言つたかも知れない。そして、それがまるで自然の帰結のようにして、私も彼とともに笑い——腹の底からの笑いを笑つていたことだろう。一瞬のうちに、私はそれだけの図柄を想像のうちに描いていた。

しかし、私は眼を伏せていた。

Aがタコ云々の話をもち出したとき、私が思い浮かべたのはAの顔というよりは、そのときの私自身の反応だったかも知れない。あ、これはまずいなと思つたのにも、たしかに、タコ云々の計画によってAの国籍離脱という決意がキチガイじみたものにとられるという懸念が働いていたにせよ、もうひとつ、自分にとつてまずいなと思つたからではないか。たぶん、そのせいではないか、タコ云々の一件を打ち消すように、私は、たのまれもしないのに、世界のベトナム反戦運動の現状について早口に述べ始めていた。

3

私がキューバ革命にふしぎに親近感をもっているのは、「途中」を見たからである。「途中」というのは奇妙な言い方だが、それが私の実感にもっともそくしている。「途中」と言つても、誰も知らない「途中」だ。おそらく、中国革命のことがまったく世界に知られていなかったところに、紅軍の兵士たちの

たたかいぶりについて書いたエドガー・スノーさんも同じような感慨をもったのではないか。彼も「途中」を見たのである。その「途中」がどのような「目的地」を未来にもっているのか、そのとき、どれだけ、彼に見えていたのだろう。いや、スノーさんは私とは比較にならないすぐれた洞察力をもったジャーナリストだ。彼は毛沢東さんほどには「目的地」をみきわめてはいなかったし、そこに到達することに確信をもっていたわけではなかったにちがいないが、それでも、私がキューバ革命の「途中」を見たときほど、あてさきのない「途中」に出会った感じをもったのではないにちがいない。その「途中」を見たとき、私はいくもキューバ革命について何ひとつ知らなかった。いや、キューバそのものについて、何を知っていたというのだろう。まず、葉巻だが、ついで砂糖だが、私は甘いものには眼がないにしても、タバコはかいかいもくたしなまない。ということは、キューバがそんな嗜好品にすぎない物においても、たいして縁がなかったということだ。早い話、そのころ、私はキューバ人の名前など、誰ひとりとして知らなかった。もちろん、カストロという名前も、ゲバラという名前も、そんな耳なれない名前など、かいかいもく知らなかった。

それでも、もう時代は五十年代になっていた。ということは、世界にインドやインドネシアなど新興の独立国があまたできて、世界は「新しい世界」になっていたころの話だということだ。第一、中国革命はもう「目的地」に達していて、そこから、紅十字会の代表の李徳全さんなどが日本にもやって来て、たんへんな騒ぎをひき起していた。そのころ、私は大学生で、小説を書いていて、それは学生運動にもかかわる小説で、つまり、私は政治むき、社会むきのもろもろにまったく背をむけていたというわけではなかった。それでいて、キューバ革命のこと、その「途中」のことは何ひとつ知らな

いでいた。

しかし、これは私ひとりだけのことではなかった。そのころ、ほんとうに日本人のなかで、革新派、革命派の若者をふくめて、何人があのカストロ・ヒゲの男たちの革命のことを知っていたことだろう。いや、これは日本人だけのことではなかった。話を大きくして世界のことにしてもよろしい。当のラテン・アメリカでも、どれだけの数の人間が「途中」のことを知りつくしていたか。アメリカ合州国となると、ついお隣りにあつて、キューバを確実に支配していたというのに、カストロ・ヒゲの男たちはバティスタとたたかうと同時にあきらかにアメリカ合州国の支配にたたかっていたというのに、ほんとうにそこで何人の人間が知っていただろう。CIAの人間となると、さすがに知っていたにちがいない。しかし、ふつうのアメリカ合州国人——つまり、私自身の合州国版だ、彼は知っていたか。私がいかなことを言うのは、そのころ、アメリカ合州国のジャーナリスト（たしか、どこかの新聞の記者だった）がとつて来たニュース映画のフィルムを見たからで、そのフィルムの解説の口調が、誰も知らないところでこんなことが行なわれているというたぐいのものであつた。

場面は、今から考えると、シエラマエストラの山中であつたかと思う。迫撃砲を射つ場面もあつたか。カストロさんの顔も出て来たにちがいないし、彼の名前も解説は告げてくれたかも知れない。そこらあたりのことはまったくおぼえていないのだが、ただ、この世界の誰も知らない山のなかに、教授だったか知識人^{インテリ}だったか、それとも、「学士様」といふぶんのヤユをこめて解説は言つたかも知れない、そういうのを指導者とする連中がたてこもっている——そんなぐあいに解説は進んで、結びは、連中の未来は海のものとも山のものともつかない。

つまり、「途中」であるということだ。私がこのところで奇妙に感慨をもよおしたのは——いや、感慨というよりは感動と言ったほうがいいだろう、その証拠に今でもフィルムのことをおぼえているのだが——さきゆきがまつたくさだかでなかったからだろう。そのさきゆきのまつたくさだかでないことに懸命になっている、生命までをも賭けている一群の人間たちがいる——そこで、私は感動したにちがいない。そして、もうひとつ言えば、彼らのその懸命の努力を誰も知らない。

「目的地」にまで達しなければ、カストロさんの名前など、今日、誰が知っているだろう。それは、シエラマエストラの山のなかに、彼らのむくろとともに朽ち果ててしまったにちがいない。キューバ革命が「目的地」にまで到達して、カストロさんの名前がもてはやされるようになったときに私がまず思い浮かべたのはそのニュース映画のことで、それは、つまり、「途中」のことだ。それから、私は、「途中」になみなみならぬ関心をもつようになった。たとえば、歴史というしろもの、そんなふうに見える、あるいは「結果」の羅列でなければ集積で、一度、「途中」だけを拾い集めて歴史を書いてみると、みたらどうだろう。

そんなことを考えるようになったせいも、私は、いつのまにか、「途中」の専門家のようになってしまうていた。政治むきのことならばかりではない、たとえば、堀江謙一青年が太平洋をひとり乗りのヨットで渡った——その「太平洋ひとりぼっち」（という本がのちに出た。私はその本を愛した。「途中」の心細さ、ウンザリさかげんが率直に書かれていたからである）の旅のことだって、実は、私は「途中」で知っていたのである。彼を個人的に知っていたというのではない。ある日、新聞を見ていると、大阪の青年がひとり乗りのヨットで太平洋横断に出かけた。三カ月経って消息不明なら、それは太平

洋のどこかでおダブツしたということで、そのときには搜索をしかるべきところをお願いせよと言っておいて出かけた、その問題の三カ月はすでに経ってしまった、それで家族がその事実をあきらかにした。青年の安否が気づかわれている——という趣旨の記事が目についた。記事は、成功後のいろんな新聞のいろんな記事からは想像もできないほどの冷たい感じのもので、一口に言ってしまうえば、バカ者危うくおダブツか！

実際、堀江青年が「目的地」にまで到達しないまま太平洋のどこかに消え失せてしまっていたならば、彼はまさしくそのバカ者以外の何ものにもならなかったにちがいない。記事を読んだとたんに、私は、あ、ここに「途中」がいるな、と思った。「途中」があるな、と思ったのではない。いるな、と思った。「余計者」ということばがあるなら、「途中者」ということばがあつてもよいだろう。「途中」がいるな、という感じは、「途中者」というひとりの人間と、その人間がおかれている（いや、それは自らが自分の意志でつくり出したのだ）状況をともにふくみ込んでいる。それで、あくまで、あるな、ではない、いるな、だ。

そこで、堀江青年の「太平洋ひとりぼっち」の旅は見かけの上からはまったく縁もゆかりもないはずのキューバ革命と似ていて、いや、一致していて、新聞記事に見入る私の眼にまるで自然の連想のようにして昔見たキューバ革命の「途中」のニュース映画の場面が浮かび上つて来た。

それから数日経つて、堀江青年がサンフランシスコに到着したという記事が各紙にデカデカとつた。そして、そのときには、もう「途中」の記事は人びと誰もの記憶から消え去っていたにちがいない。そのときも、そのあとも、私はその記事に言及した人に出会ったことがない。堀江青年は「目的

地」に到達していたから、すでにバカ者ではなかった。「途中者」ではなかった。だから、もう誰もそのことには言及しなかったのだろう。

4

映画に関連して言えば、フィルムのなかで「途中」を見たことは、もう一度ある。これもニュース映画のなかであった。

第二次大戦がすんでしばらく、いくさがるのは国家というものがあるからで、世界から国家をなくそうという運動がひとしきり盛んだったころがあった。「世界連邦」をつくれというたぐいのものがそのひとつだが、運動がさかんだったというより、そうした考え方が人びとの心に自然なことのようにして受けとられた一時期があったと言ってもよい。「国際連合」とか「ユネスコ」とかがかなり人びとのあいだで人気があったのも、そういう状況が下地にあったからだと思う。そのうち、世の中はふたたび大国の政治のゴリ押しが目立ち始め、ゴリ押しに反対するアジア、アフリカの新興国のほうでも、ゴリ押しにたちむかう強力な武器としてナショナリズムがおもてに押し出されて来たから、そんなふうな「反国家」意識は運動もろともどこかに消え去ってしまった。すくなくとも、世界の人びとのあいだで主流ではなくなってしまったと言つてよいだろう。社会主義国のほうでも目立つのはナショナリズムで、社会主義のほんとうの目的であったはずの「国家の消滅」など、もうどこの社会主義国でも、えらいさんの演説に出て来ないようになっていた。私はいまだに思い出すが、大真面目に「世界連邦」の理想を説いていた若者を、学生運動の活動家が「このブルジョワの手先め」と冷笑

する図柄——これは、そのころ、私があちこちの会合で見かけたものであった。

話を戻して、その「反国家」感情なり意識なり、あるいは、運動なりがかなりの力をもっていたころのことだ、そのころ、私は問題のニュース映画を見た——つまり、「途中」を見たのである。

なんでも国家こそ諸悪の根源なりと考えた若者がいて、その若者はアメリカ合州国の人間で、アメリカ合州国の人間というのは、A同様、思いついたこと、考えたことは、すべて、そのままやってのけるという勇氣と猪突と偉大と愚劣と型破りと無計算とをあわせもっている人間らしくて、彼はほんとうにその通りやった。国籍を離脱することにしたのである。

くわしくは知らぬが、合州国の法律では、そんなふう宣言して、「国籍離脱届」を政府にむかつて出すと、ほんとうにそういうことになってしまうものらしい。彼はめでたく「非アメリカ合州国人」になり同時に「無国人」になったが、それこそまさに彼のめざしていたことだったが、たちまち、彼は現代世界の矛盾に正面からぶちあたることになった。

矛盾は、一口に言えば、こうなる。世界には国家以外はなく、つまり、「無国」というところはなく(第一、そういう場所を何と呼んだらよいのか。私たち人類は、どの民族のことばでも、まだ適切な用語をつくり出していないのだ)、したがって、「無国人」が合法的に住めるところはない。

おたがいケンカばかりしているように見えるが、国家にはなれあいめいた側面があつて、そのひとつが、おたがい、国家の成員だけを排他的に認め合おうとすることである。たとえば、国家は外国人が旅行に来たり、住んだりすることを許すが、それはあくまでレッキとしたほかの国の国籍をもつた「外国人」の場合で、国籍をもつていなければおしまいである。亡命者だつて、もともとはどこか

の国の人間ということになってきているのだし、そのうちまためでたくどこかの国の人間に返り咲くことになるのかも知れない。そこへ行くと、「無国人」は困る。どう取り扱っていいのか。そこは国家という存在の根拠にかかわって来ることで、「無国人」を認めれば、その根拠があきらかにゆらぐのである。国家というもの、もともと、「無国人」などはこの世界にはいないという前提においてつくられているのだから（国家と「無国人」という矛盾した二つのものを同時に存在せしめる方策はただひとつ、世界に国家でないところ——「無国」をつくり出すことだが、そんなものはまだできていない。世界はいぜんとして国家にみちみちているのである）、「無国人」を許容することは、まさしく国家の「自己否定」だ。もうひとつ言うと、国家の原理にしたがえば、全世界の人間は誰ひとりこぼしなく「何国人」（ひとまとめにして言ってしまう「国家人」）で、そうきめつけておかないと国家の原理はゆるぐのだから、国家の原理を認めてしまえば（そして、それを、今、全世界の人間はいやおうなしに強制されているのだが）、人間は必ず「何国人」で、「国家人」で、逆に、「何国人」でないのだったら、そんなものは人間でない。「無国人」は断じて人間ではないのだ。

それだけのことを、国家はおたがいに認め合っているように見える。それが、私の言うなれあいの根本のありようだ。

5

つまり、その「無国人」となったアメリカ合州国の若者（Cとしよう）は人間でなくなったということだ。たとえば、早い話、Cが「無国人」となった瞬間に、合州国の人口はひとり確実にへったこ

とになる。そのひとりがどこかの「何国人」になれば、その「何国」の人口がひとりふえたことになって、全世界の人口は同じだ。全世界の人口が各国の人口の総計であるかぎり、ことのありようはそうなっていて、それ以外にはなくて、ここで、私が思い出すのは、「アボリジニー」と呼ばれる一群のオーストラリアの人びとのことだが、（まずもつて、彼らのことを何と呼べばよいのか。「オーストラリア人」と呼ばれることに、彼らはまず異議をとねえるだろう。「アボリジニー」というのは白人たちが、先住のそれらの肌の色の黒い人たちにつけた勝手な呼称だが、彼らの土地につけられた「オーストラリア」という呼び名も白人たちが勝手につけた名前にはすぎない）、つい数年前まで、彼らの数は、オーストラリアの人口統計のなかにふくみ込まれていなかったのだ。つまり、自分たちはカンガルーと同じだったというわけです——と、その事実を教えてくださいました。「アボリジニー」の運動の指導者のひとりが私に言った。「自決」を求める人びとの運動が世界にひろがる昨今のことである、「アボリジニー」たちも解放運動をかたちづくっていて、たとえば、「オーストラリア黒ヒョウ党」というのがあった。しかし、ここにまで、なぜ、「オーストラリア」がアタマにつくのか。

6

カンガルーでなくなったら、どうして、「オーストラリア人」になるのか。そんなふうに、みなぎられてしまうのか。人間であるということにどうしてならないのか。

Cは「無国人」となり、当然のことに、住むところがなくなった。国家でないところ、つまり、「無国」の場所がこの世界にはないからである。あげくのはて、彼がえらんだのはパリの「ユネスコ」の敷地で、私がニュース映画で見たのは、そこにテントをたてて住む彼の姿だった。

もちろん、「ユネスコ」の敷地とて、「無国」の場所ではない。そこはまずフランスというレッキとした国家に所属する場所で、まず、現実的に「無国」ではない。ついで、原理的に言っても、「ユネスコ」という国際機関、いかにも国家を超越するみたいなものに見えるが、あれは、もともと、国家の存在を前提としたものだ。その存在が単数ではなく複数、いや、多数であるというだけのこと、**「国際」**ということからは、本来、そうしたものでないのか。国家がなければ、「国際」はない。それははっきりしている。

国家の利害はおたがいさまなのでおたがい見て見ぬふりをしましょうというのが、私の考えでは、「国際」の本質だ。もつとも判りやすい例が国家がおたがい認め合っている外交官特権や大使館の敷地の治外法権で、すべて、なれあい——暗黙のなれあいの産物なのである。おまえの痛いところをつつかないから、こつちの痛いところもつつかない。武士はあいみたがい。外交官はあいみたがい。いや、権力者はあいみたがい。

「ユネスコ」の敷地というようなものも、そのあいみたがいの相互扶助、いや、相互黙認の精神が生み出したエア・ポケットで、そこにうまいこともぐり込んだのが、今や「無国人」となったわがCで

あつた。

その敷地からエッフェル塔が見えた。くわしくはおぼえていないが、ニュース映画はエッフェル塔を背景にCのテントをうつし出していた。エッフェル塔は名にし負うフランス国の象徴、である。そこへもつて来て、たたずまいも十九世紀は「鉄の世紀」だったという事実を一身に体現していて、要するに、原理においても現象においても、まことに確固と存在感があつて、そのたしかなことのあるようそのままでは、Cのテントはいかにもたよりなげに心細くあつた。エッフェル塔は今から百年ほども昔のパリの万国博のためにおつ立てられたのだが、そのパリの万国博と云えば、ひたすらフランスの国威誇示のためのものであつたこと、これはもう今さら言うまでもないことがらだろう。その十九世紀ナショナリズムの権化の鉄塔が見下すところに二十世紀インターナショナリズムという名前のナショナリズムの相互扶助、相互黙認の象徴の「ユネスコ」があつて、二つのもの中間にCというひとりの「無国人」は彼の「無国」をうちたててようとしたのだが、そのかぼそげなテントが象徴する通り、はたしてそんな事業がうまく行くのか。ニュース映画を見ているだけでも、いかにもあぶなつかしげなものであつた。「途中」だという気がした。しかし、その「途中」、ひよつとすると、どこにも永遠に行きつくあてのない「途中」ではないのか。

同じ「途中」だが、カストロ・ヒゲの男たちの「途中」とはちがつていた。ニュース映画を見たときにも何かしらちがう感じをもつたのだが、はつきりとそのちがいが私に体得されたのは、あと十年以上も経つて、AがAを連れて、タコを持って、私のまえに立ちあらわれて来たときだつた。

カストロ・ヒゲの男たちも「途中者」であつた。彼らもたしかに「途中」にいて、「目的地」に行きつけるかどうか、まったくさだかでなかつた。その事実がニュース映画のフィルムを通して私を奇妙に感動させたのだが、さだかでないのは「目的地」に行きつくかどうかということであつて、「目的地」そのものはまだしも見当がついた。もちろん、そのとき、私に、キューバ革命の何たるかが判つていたというのでもなければ、革命の今日のありようを想像していたというのでもない。そんなことは、勝手な言い草になるかも知れないが、カストロ・ヒゲの男たち自身にもまったく判つていなかったことだ。彼ら自身が率直にそんなふう語つていて、私はそうした率直さが好きだ。

ただ、バテイスタという名前は知らなかつたにせよ、何やら悪いことをしている政府があつて、それを打ち倒そうとしているというようなことは、そのときの私にも見当がついた。悪い政府を打ち倒して、新しいいい政府をつくる。古い悪い国を新しいいい国に変える。――

それだけの「目的地」の見当は、ニュース映画を見ていて、たちどころについたのではないかと思う。それで、くだいようだが、問題は「目的地」に行きつけるかどうかということで、「目的地」そのものについてではない。

「無国人」Cについてのニュース映画を見たときはちがつた。彼もまた「途中者」だったが、はたして、その「途中」の先に、行きつく「目的地」があるのかという思いがまず霧のように私のからだを包み込んだような気がする。カストロ・ヒゲの男たちの「途中」は私を感動させた。しかし、Cの「途

中」を見たとき、私を感じたのは、まず、不安であった。ふかい霧のなかにひとり取り残されたような。エッフェル塔は霧のなかにほのかに見える。「ユネスコ」も見える。しかし、かんじんのCのまわりには何があるのかよく見えない。

「目的地」の姿がかいもく見えて来ないのであった。ありようがさっぱりとつかめない。生まれてこのかた国家のなかに、国家にみちみちている世界のなかに生きて来たので、どうにも視界が国家の外にひろがって行かない。たとえて言ってみれば、男が突然女になれと言われたようなものだろう。いや、それなら、まだしも人間としての共通項がある。人間があくる日からネコになれと言われたような——もうひとつ言ってしまう。人間が、たとえば、岩石とか海とか、そんなものになれと言われて、さて、どうするか、どうすればよいのか。

人間が海になる。

そんな感じだ。

それほどの途方もない茫漠——「無国」とは、まさにそのようなものでないか。

人間が海になる。

滅相もない。

しかし、なれ！

9

若者は、そのとき、海として私のまえに立ちあらわれて来たのだ。それで、私は不安になった。

そこへ行くと、同じように海があったとしても、堀江青年の場合はことに簡単だった。彼は太平洋というたしかに巨大な海を渡つたが、海そのものは「目的地」ではなかった。あくまで、陸地——サンフランシスコが「目的地」で、それは見えていた。

しかし、たとえば、今、彼が、ただ、海に行くためにだけ「ひとりぼっち」の旅に出かけたという。べつに行きつくあてはない。一生、彼は海にいて、そこで死ぬ。その場合が、まだしも、「無国人」の若者Cの場合に似ているような気がする。

しかし、これでもまだちがう。どこか根本のところがちがう。

たとえて言ってみれば、それはいろんな国をさすらい歩く亡命者みたいなものだ。故国はすでに消滅していて、彼にできることはいろんな国をわたり歩くことしかない。そのわたり歩きのなかで、彼はくらしをたて、恋もし、子供もつくり、病気もすれば年もとつて、あげくのはて、死ぬ。

ただ、この場合でも、海はまえもつてあるのだ。いろんな国という海があつて、そこに彼は「ひとりぼっち」の旅に乗り出す。

「無国人」の場合はちがう。彼には、海はまえもつてない。いろんな国などないのである。あるいは、そういう海の存在をまつこうから否定している。

で、どうするのか。

海がない以上、航海して行くべき海がない以上、自分でつくるよりほかにない。海をつくつて、そこを自分で動く。それは、つまり、自分が海になるということではないか。

若者は、したがつて、海になる。なるよりほかにない。

若者よ、海になれ！

10

私も国家などいらなないと考えたことはたびたびあった。今もよく考えるが、そのCのたよりげなテントのニュース映画を見るまでも、そんなふうには何度も思った。だから、本来なら、エツフェル塔を背景としてかぼそく立った彼のテントを見たとき、快サイを叫んでもよかつたにちがいない。やつたな、と心の躍動をおぼえてもよかつた。

それがそんなふうなことに逆にならずに不安と戸惑いを感じたのは、やはり、そこに海を見たからだろう。その海は——海そのものというよりはその茫漠は、私に次のように告げていたにちがいない。いや、それはすでにして命令だった。

きみは「無国」にあこがれている。では、海になりたまえ。

オダマコトよ、

海になれ！

11

ニュース映画を見てから十年以上も経ってAが私のまえにあらわれ、それからまた何年かが経って、私はその「無国人」となったCのその後の話を聞いた。十年ものあいだ、海に消えてしまった、いや、自らを海に化し去ってしまった彼のことが心の奥底のどこかにひっかかっていたので、私は、ときど

き、そんな事情にあかるいような人に出会うごとに彼の話をもち出していたのである。まず、誰も知らなかった。それよりおどろいたのは、Cのことは当時はかなり話題になった事件であったにもかかわらず、平和運動とか反戦運動とか、そういった運動にかかわりあいのある人たちをふくめて、誰も記憶していないことであった。「世界連邦」の運動をしている人も知らなかった。へエ、そんな面白いことをした人物がいたんですかと、彼は眼をまるくした。

Cのことが判ったのは偶然なことだからで、世界のヒッピーの専門家みたいな男と話していたときだった。彼は日本人だが、ヒッピーの「生態学者」と自らを称していて、なるほど、ネパールでヒッピーはどうしている、ケニアのヒッピーのたまり場はどこかで、というぐあいによく知っていたが、気になるのは、彼が日の丸の旗をいつも背中にかついで歩いているようなヒッピーであることであった。しかし、これはふしぎでも何でもないことらしくて、世に言うヒッピー、「無国人」を標榜しているみたいだが、かなりの数がナシヨナリスト・ヒッピーと見えた。彼もそのひとりなのだろうが、オランダはアムステルダム、ヒッピーの話をしていて、そのうち、アムステルダムにはへんなオッサンがいますよ、ということになった。

昔はアメリカ合州国の人間だったらしいが、国籍を離脱して、どこにも住めぬようになって一時はパリの「ユネスコ」の敷地にテントをはって住んでいた。それからどこでどうしていたかは知らないが、今はオランダ政府のお情けでアムステルダムの運河に住んでいる。

運河に!?

私は思わず大声を出していた。

もちろん、船にですよ。

彼はびつくりしたように私を見てから、ゆつくり言った。

運河に船がつないであるんです。そこに住んでいよる。

彼は、ヒッピーの特徴であるべきアゴヒゲをしごきながら、さらにゆつくりした口調でつけ加えた。ネパールのヒッピーたちのあいだでくらししているあいだに、彼はそんなふうなものの言い方を身につけたというのである（とにかく、オダさん、日本人は忙しすぎますよ、よくないね、これは）。

とにかく、ヘンなオッサンですよ。あれは。

さらに一言、ゆつくりとアゴヒゲは言った。

12

もうひとり、べつの種類の「途中者」とちゆうもののことを書いておきたい。「余計者」ならぬ「途中者」のことだ——と私は今書きかけたが、考えてみると、「途中者」という存在、すべて、「途中者」ならざる人間にとつては「余計者」ではないか。「途中者」ならざる人間には二種類あつて、まず大多数がコンリナイ出発しない人間、どこにも出かけようとしなない人間で、そういう人間たちは、原理においても実際においても、「途中」にいるはずがない。さて、それが大多数の場合で、人類の大半がそうだとすれば、少数者の「途中者」ならざる存在は目的地に着いた——目的を達してしまった人たちだろう。たとえば、「革命」という目的を果した人たちである。

しかし、原理と実際の双方から言つて、こういう人間はなかなか世の中にはいないだろうと思われ

る。太平洋をひとり乗りのヨットで押しわたるといふ単純な（単純だから簡単だと言っているのではない。堀江青年の事業に対して敬意を表して念のためにつけ加えて言っておきたい）場合でなければ、今ひき合ひに出した「革命」というような目的の場合である。「革命」とは、つまるところ、「永久革命」であつて、「革命者」は、いつだつて、「途中者」なのである。それがそうでないと思ひ込んだとき、つまり、「革命」を達成したと考えたとき、「革命者」はたんなる「権力者」となる。ことばをかえて言えば、権力にまるとからみついて、そこからもう一步も外へ踏み出したくない。もうそこらどこへむかつて出発しようとしないのである。

話をそこまで引っぱり上げてえらいさんのことにしなくてもよろしい。たとえば、ソビエト国——このところ、ソビエト国というと、フン、あんなもん、あんなものが社会主義国かねというぐあいに話が進むのが世のつねとなつてしまつてゐるきらいがあるが、私はそういう流行に乗つて話をするつもりはない。それどころか、「あんなもん」であらうとなかろうと、これまでソビエト国という国家が行なつて来たことは偉大であつたとまずもつて賞揚しておきたいのだが（ヨーロッパ名うての「後進国」を世界の巨大国にしたであげたというようなことを私は言つてゐるのではない。それより私にとつて大事なことは、たとえば、働けなくなつたお年よりが安心して生きられる社会をつくり上げたことだ）、ただひとつだけかかぬのは、えらいさんはおろか、なみの人びとのレベルに至るまで、もう到達してしまつたという意識にみちみちてゐることである。もちろん、たとえば、生活水準とか工業水準とかにおいて、えらいさんも人びとも到達してしまつたとは思つてゐないだろう。まだまだ「途中」だという意識でゐるにちがいないが、実際以上にそういう感じてゐるにちがいないが、こと

を「革命」というかんじんカナメのことがらにもつて行くかどうか。あそこへ行ってまず感じるのは、まずもつて「革命」の不足であつて、どうしてそんなふしぎな感じにとられるかというところ、たとえば、人びとが当国には「革命」が必要だなどと言わないからである。まったくそう思っていないからである。ほかの国の「革命」のことはいざ知らず自分の国のそれとなると、「革命」などという妄念にとりつかれるのは、世界各国、若者とインテリということに話はきまつているが（この場合の最悪のコンビネーションは若者＋インテリ、つまり、学生である）、ソビエト国の若者、インテリどちらにきいても、あるいは、その双方であると期待されているところの学生に訊ねても、彼らの口から自分の国の「革命」のことなど、十中八九、口をついて出て来はしないのである。ホンネは言うに及ばずタテマエとしても出て来ないのがほかの社会主義国の人間ともちがうところで、とにかく、もう「革命」はなつたのである。とやかく言う筋合いはない。

ソビエト国の子供用の英語の字引きを買ってみたことがあつた。私は予備校で英語を教えているので、世界のあちこちでその国の英語の教科書やら字引きやらを買つて来ることにしているのだが、ソビエト国の子供用の英語の字引きにはきわだつた特徴が二つあつた。ひとつは、これはなかなか「革命」の視点に立つた（すくなくとも、「ソビエト革命」の視点に立つた）字引きであるということであつて、そこで、字引きはみごとに革命的であつた。たとえば、「神」ということばがそこにはなかつた。あるいは、「天国」もなかつた。いや、「性」もなかつた。

最後の「性」のところはいただきかねるが、「神」とか「天国」とか、そういうアイマイモコとした存在がことばもろとも字引きの世界にはないことは、すくなくとも、そういう世界をソビエト革

命が一九二〇年代に歴史に突き入れたという衝撃を思わせるところがあって、私は好きだ。一言にして言えば、こういうのが、こういう衝撃が「革命」なのである。そして、こういう衝撃がたいして見あたらないのが今のソビエト国のありようで、そのありよう、まずもって退屈だ。そこでマルクスが説かれ、レーニンが論じられるとしても、もうそれは、いわば、革命のクンコ学みたいなもので、そういうものはわが日本国にみちている。たとえば、マヤコフスキーがマルクスを説き、レーニンを論じたときには、世のあまたのアイマイモコを切り裂き、未来をその切り裂いたむこうに見たほどの衝撃に彼の行為はみちていたにちがいないが、その衝撃の片リンを私はさつき言った子供用の英語の字引きにカイマ見るのであるが（実際、「神」^{ゴッド}と「天国」^{ヘブン}の二語が字引きにないことを見つけ出したとき、私の頭に浮かんだのは、まことに唐突なことに、マヤコフスキーというひとつらなりの文字であった）、そのマヤコフスキーも、今やモスクワの広場の名前となり、劇場の名前となり果ててしまった。到達してしまったのである。不朽の名前となつてしまったのである。どこへも行きようがない。

その字引きのもうひとつの特徴は、例文が正確であるということであつた。「社会主義」^{ソシアリズム}というのをまずひいてみた。ふつうなら、子供用の字引きにはコンリンザイおさめられていないそうしたことばがあるのには半ば予期したことは言えおどろきもし感心もしたが、いや、やはり、「革命」をやつた国なのだという実感がわき上つて来て感動さえしたが、面白いのは例文であつた。「われわれは社会主義をつくり上げた」と書いてあつて、それだけではべつに面白くも何ともないが、「共産主義」^{コミュニズム}（もちろん、このことばも子供用の字引きにあつた）のほうの例文と照らし合わせてみると、なかなか興味ぶかいものになる。「社会主義」の例文のほうはそんなふうに「現在完了形」で書かれていたのだが、

「共産主義」のほうは、「われわれは共産主義をつくり上げつつある」と、そちらは「現在進行形」の例文であった。なかなか正確なものだなと、私はふしぎに感心した。

しかし、そういう正確な例文によると、もうソビエトという国は「社会主義」を達成したことになるが、そこまで到達してしまつたのなら、「革命」というようなものはもう必要のないことなのだろう。すくなくとも、そうとしか言いようのないフンイ気がソビエトの社会にはみちみちているのだが、さて、それがそうだとすれば、「社会主義」から「共産主義」に至る道すじには「革命」ということばで言いあらわすほかはない大きな変革は必要がないということにもなる。「共産主義」については、その子供用の字引きの例文は「現在進行形」を用いているのだが、「現在進行形」というしろもの、なるほど考えてみると、途中で大きな飛躍があつたり、切れ目があつたりするときに使う時制ではない。そこらあたりがどうも中国人の革命観、社会主義観、共産主義観とちがうかんじんカナメのところだ。「文化大革命」というような途方もないことをやり出した中国では、子供用の英語の字引きの例文ではどういふぐあいになつてゐるのだろうか。一度、見てみたいものだと思う。「文化大革命」が始まつたころ私はたまたまモスクワにいたのだが、私のまわりにいたソビエト人たちの反応は、せんじつめて言えば、東方の野蛮人たちが何か異様なことを始めたということにつきる。たぶん、ジーンギスカンが東方から西方に迫つて来たとき、ヨーロッパ人たちがそんなふうな不安とおびえにさいなまれたにちがいない。とにかく何か未知で途方もないことが起りつつあるのだ。それがわが身に迫つて来てゐるのだ。わが身にまでやつて来て、わが身がそこにまぎ込まれてしまえば、これまでにわが身が到達した安定からもう一度混乱の「途中」におとし入れられる。ことばをかえて言えば、それ

らの不安と恐怖は「途中」不安であり、「途中」おびえであったにちがいない。人間はどうあつても安定していたいのである。「途中」の不安定にたえられない。

少し大きな言い方だが、「文化大革命」のニュースを知ったときのソビエトの人びとの反応はそんなふうなものではなかったかと思う。私のまわりにいたのは作家とか新聞記者とか大学の先生とか、「インテリ」だが（ある意味では、ソビエトの知識人ほど「インテリ」を感じさせる種族はない。すくなくとも、それは、「インテリ」と「非インテリ」双方がもつ「非インテリ」との区別、差別の観念によつてくつきりと浮かび上る）、「非インテリ」のソビエトの人びとの反応もさして変るところがなかったように思う。いや、逆に「インテリ」の反応も「非インテリ」と変るところがなかったと言つたほうがもつと正確かも知れない。イリヤ・エレンブルグは、「文化大革命」の野蛮性を例証して、自分の名前が漢字でこんなふうにかかれるのだと言つた。つまり、「イリヤ・エレンブルグ」と、ここで私が書いているように片カナで書かれること自体が、彼にとつてふしぎなことであり、野蛮性の証拠なのであつた。

無理のないことだという気もする。せつかく到達し、つくり上げたはずの革命をその根もとのところからゆるがせようとするのであるから、ソビエト人の気持は、正直言えば、無茶シナサンナ、であつたろう。これがよそのどこか遠い国の異質の出来事であつたのなら他人事としてすましてきれいな顔をしていることができるのだが、なにしろお隣りの巨大な国の出来事で、おまけに、自分もお隣りもマルクス主義による「革命」をやつてのけたのだ。「無茶シナサンナ」という気持の底には、「オレノ物ヲコワサンデクレ」という切なるねがいがかくみ込まれていたにちがいない。「折角ツクリ上ゲタバ

カリナンド」と、そのねがいは野蛮人に必死に訴えかけている。そういう必死の訴えかけを無視して無茶を強行するのは野蛮人にきまつている。野蛮人以外、誰がそんなことをするものか！ とどのつまり、漢字で西洋人の名前を書いたりするのが、野蛮人の野蛮なる所業の象徴だということになる。

子供が砂浜につくり上げた砂のお城を懸命にまもっている感じもしないでもない。折しも馬に乗った見知らぬ少年が砂のお城を踏みつぶさんばかりの勢いで馳けて来ているのである。

こういう凶柄の絵を描いてみないか。題して、人間の「途中」に対する根源的「おびえ」、「不安」。あるいは、「中ソ論争」。

つづきは製品版でお読みください。